

J.ピヒカラ

救いとクリスチャンの成長

ピリピ3 : 9-16

3:9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

3:10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、

3:11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。

3:12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。

3:13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、

3:14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。

3:15 ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。

3:16 それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。

自分に語る人間

人間って、毎自分自身に話しかけている存在です。そしてその話はどちらかと言うと主に否定的な内容です。「又同じ失敗をしてしまいました。やはりあなたはだめです。もっと頑張らなければなりません。」「クリスチャンとして成功するために、もっときよくなれないとだめですが、何時も同じ罪に負けて、あなたは失格です。」そして頑張りだして、疲れて、又もっと否定的になってしまいます。

多くのクリスチャンにとって聖められなければならないと言う勧めは大変な重荷です。たとえばもっと祈らんとだめです。もっと聖書を読まんとだめです。もっと賛美せんとだめです。しかし、クリスチャンの成長が少しも進みません。かえって、色々の人間関係のトラブルの中に、後退する感じさえします。

最近ある社会の中の成功についての本の評論を読みました。それによると、大体の人が成功についての考え方は次のようです。「頑張って、人々に認められて、出世して、又頑張って、もっと認められて行くプロセスのようです。」しかし、著者によるとその考え方で成功を得られません。かえって、神様に創られて、イエス・キリスト様の十字架の贖いによって神様の子供、すなわち王子である自分の身分を先ず認識して、すなわち救われたものとしてもう既に最高の地位にいるものとして自分を見て、そこから人に対してしもべの姿勢で仕えるなら、本物の成功が得られます。

汽車ぼっぼの詩篇

賛美と感謝で溢れる詩篇103篇を歌った時にダビデはどんな状況だったのでしょうか。おそらくサウロ王から逃げて、アドルムの洞穴の中に、石の上に寝た憂鬱の朝に起きた時と思います。その中に彼は先ず自分自身の魂に語りだしました。

「わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。」

そしてもう一度自分の魂に語りかけます。

「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのす

すべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。…」

ダビデはそれからずっと自分の魂に救いの福音、すなわち主の大きなみ業を語ります。

ダビデは聖めの秘訣をしっていました。それは朝一番に自分の魂に救いの福音を語る事でした。

救いは確かに一瞬の出来事で、そこから始まる聖めは一生のプロセスですが、そのプロセスの秘訣は毎日救いの原点であるイエス・キリスト様の十字架の下に戻る事です。救いと聖めとの関係を先ず自分の証しとして少し分かち合いたいのです。救いも聖めも両方とも神様の聖霊様のみ業です。しかしその事実を受け止めるにはかなり険しい道を歩まなければなりませんでした。

救いの証し

ルターは使徒信条を説明する時に興味深い表現を使います。「私は…主イエス・キリストを信ずることが…出来ないことを信じます。」 一見矛盾のように聞こえますが、とても大切な真理を語ります。と言うのは、救いは人間の理性や能力や決定や行動などによって与えられるものではない事をルターは強調します。救いをもたらせるキリスト信仰は聖霊様の働きによって初めて生まれるものです。

私は1944年に6人兄弟の4人目として信仰の家庭に生まれました。そして間もなく幼児洗礼を受けました。小さい時から神様の話やイエス様の話をよく聞かされました。日曜日学校や礼拝によく通いました。しかし、中学校時代に自分の現実と社会の現実が説教の中に聞いている聖書の教えと余りにもかけ離れている事に気が付きました。自分が罪深い存在である事が益々分かりだしました。その反面によい暖かい家庭、親しい友達、学校での成功などの事が分かりきった事ではなく、神様の私に対する愛の表れとして感じ始めました。神様はそのよい事柄を通して私を招き始めました。母が私の心の動きを案じて、色々と信仰のよい本を私に読むように渡し、それらを読むほどに読み始めました。

15歳の時から上の兄弟姉妹と一緒に教会の青年活動に参加し始めました。個人的な信仰を持つ他の若者と自分の状態を比べると、自分には何か大切なものが欠けていたような気がしました。彼らが持つ喜びや平安が私にはなかったからです。羨ましくなって、私も本物のクリスチャンになりたいと願う気持ちが益々強くなりました。そして、1960年の正月にキリスト者になる事を決めました。と言うのは、クリスチャン青年がしている事と同じ事をしたらクリスチャンになると誤解していたので、彼らの真似をし始めました。

彼らがやっていた事柄は聖書を読む事、お祈りをする事、教会の集会に参加する事、証しする事、道徳的に正しく生きる事でした。それらを真剣に、全力を出して、やりだしました。聖書を毎日3章ずつ読む事は何の問題もありませんでした。教会の諸集会に一週間に8回も出席する勢いでクリスチャン青年の交わりを楽しみました。祈りの方はかなり苦痛でした。5分祈ったらもう限界と何回も感じました。本物の祈りは聖霊によるものですから、聖霊様がまだ心の中に入っていなかった時に祈る事は辛い義務に過ぎませんでした。証しも大変な挑戦でしたが、一ヶ月半経つとある青年たちの集会で初めて口を開いてイエス様の証しをしました。まだイエス様を知らなかったのに、皆の真似をしました。しかし、最も難しい事はやはり正しく生きる事です。聖書を読めば読むほどイエス様の道徳的な要求の厳しさにぶつかって、自分の心のどうしようもない罪深さが益々明らかになりました。頑張れば頑張るほど絶望の沼に沈んでしまいました。「どうして私がクリスチャンになれませんか。他の青年に出来るのに、どうして私が何時も罪を犯して、罪の奴隷でしょうか。どうして私には喜びや平安がないでしょうか。」

半年以上の一生懸命な努力の結果、絶望に至りました。神様を信じる信仰さえ失いかけていました。丁度その時期に堅信礼を受けるために2週間の教育キャンプに100人の他の15歳の男女と一緒にある島のキャンプ場に行きました。ルターの小教理問答やその他の聖書の学びを中心とするとても楽しいキャンプでしたが、私の心は罪意識や罪責感で一杯、又自分が絶望的な人間だと言う気持ちで一杯でした。あるキャンプファイヤーの時に牧師がイエス様の十字架の血潮による罪の赦しのお話をしました。その時に神様に向かって心の中に次のようなお祈りをしました。

「神様、あなた様がいらっしゃるかどうかさえ分からなくなりましたが、もしいらっしゃるなら、私を助けて下さい。私のところに誰かを送って下さい」と言う不信仰の祈りでしたが、しかし正直な祈りでした。

あの当時のキャンプでは宿泊はテントで行われましたが、私には一人用のテントがあって、夜の10時前にもう既に寝袋に入ろうとした所にキャンプのあるリーダーが現れて、私に次のような言葉を言いました。「あなたは確かにいい子ですが、あなたの心の中にまだイエス様が入っていないから、今入れるように祈ってもいいですか。」私は涙で顔以外には何もいえませんでした。あの方はお祈りをして帰りました。それから10分後ですべてのリーダーが集まって、眠る前の賛美歌を歌ってくれました。その内容は天国についてでした。罪のない、幸せの国についてでしたが、その時に主の聖霊様が私の心に入って下さいました。心の重い荷物が何処かに転がって、何ともいえない平安に包まれて静かに眠ってしまいました。次の朝起きると心から喜びの泉のようなものが湧き出て、自然の緑が何とも言えないほど美しく見えて、鳥の綺麗な鳴き声に初めて気が付いたような時でした。その時にキリスト信仰が自分の理性や能力によって生まれるのではなく、聖霊様からの大きな贈り物、プレゼントである事が分かりました。ルターの教えとピッタリの体験を致しました。

主の業と人間の責任

聖霊様を頂くと信仰が与えられます。しかし、その事は人間の業ではなく、神様ご自身がなさって下さる業ですから、奇跡で、自分に起こった事は確かですが、それを説明できません。聖霊様の奇跡です。ただ、その奇跡はどのような環境や状況の中に起こりうるかは、イエス様はニコデモにヨハネの3章の中に説明して下さいました。それは、イエス様のみ言葉に心を開いている時に起こります。又イエス様の十字架と復活のメッセージを聞いているところに起こり得ます。

信仰が聖霊様のみ業によるプレゼントなら、どうしてある人々が信じないのですかと言う質問が当然出るでしょう。信仰は神様のみ言葉の招きに答える形で生まれますが、その招きを拒否する事が出来ます。しかし、神様の招きがなければ、人間が自分の力で信じる事が出来ません。神様の招きの時をも勝手に選ぶことが出来ません。神様のみ声を聞く時は人生で最も大切な恵みの訪れの時で、それを見過ごせば、救いのチャンスを失って、自分自身に裁きを招く結果になります。

洗礼の恵み

ペンテコステのメッセージの中に救いを求める人に次の具体的な道が教えられます：
「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」(使徒の働き 2:38-39)

主のみ前で罪を認めて、赦しを求めながら洗礼を受ける人はプレゼントとして聖霊様を受けて、信仰が与えられます。

ですから、聖霊を頂く事のしるしは洗礼です。洗礼の中に私たちの罪が赦されて、神様の子供として生まれ変わります。洗礼の中身はイエス様の十字架の死と復活に結び合わされる事です。主の十字架の死は私たちの死になって、私たちの罪の罰が終わった事になり、又イエス様の復活のいのちが聖霊様を頂く形で私たちのものになります。洗礼と聖霊様を頂くポイントはどのような体験をするかではなく、神様のみ言葉を信じる信仰が生まれる事です。信仰による歩みの中に又色々な体験もありますが、それは信仰の後で与えられて、又その体験も私たちを神様のみ言葉の約束に導きます。

救われた恵みの内容

救われた時に何が起こったかと言うと、私が恵みによって罪が赦され、義と認められて、神様の子供に生まれ変わり、聖霊を頂きました。

罪の赦し

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ1:9)

悔い改めの涙、罪を悲しむ心、ざんげの祈り、罪の告白などは罪の赦しの理由ではありません。多くのクリスチャンは徹底的なざんげの心で赦しを得ようとしますが、それは間違いです。罪の告白は赦される理由ではなく、条件に過ぎません。例えば、犯罪人が警察に言って、犯した罪を自供する事で、処罰を免れることは出来ません。かえって、物的証拠を得やすくして、裁判所に引き渡されるのを早めるに過ぎません。神様に罪を認めないなら、赦しは出来ませんが、認める事は赦される理由ではありません。理由は神様の恵み深い心です。神様は真実ですから、イエス様に罰した罪をもう二度罰する事はありません。赦しの理由はイエス様の十字架の贖いです。

義と認められる事

義と認められるのは法廷用語です。罪を犯した人を赦す事が出来ませんが、無実の人を赦す事が出来ません。義と認められる事は無罪宣言です。ですから、神様が人を義と認められるのは、その人が一生に一度も罪を犯した事のない人間として受け入れ、扱って下さる事を意味します。これは人間の経験ではなく、神様が下さる判決で、その時から人間は神様の御前で罪のない者としてずっと見なされている立場に置かれます。たとえば、神様は義と認められた人を天国行きの大きな船の中に置かれて、天国に着くのはその人の努力や頑張りには関係なく、船次第です。船の中で本人が時には嬉しくて、時には悲しくて、時には安心して、時には恐れを感じますが、船そのものは確実に永遠のみ国の港まで彼を運んでくれます。船の大きな客室の中に彼は足を滑らして、こける事もあれば、又立ち上がる事もあります。しかし、そんな事で船から落ちる事はありません。義と認められるのは本人の状態よりも、彼が置かれた、安心できる場です。

罪に対する唯一の解決は正しい処罰です。罰によって正義が成り立つからです。どうして正しいお方でおられる神様は実際に罪だらけの人間を義と認めることが出来ますか。どうして罪ある人間を罪のない者と認める事が出来ますか。それは、キリストの贖いによる「幸いな交換」です。人間の実際の罪をイエス様の実際の十字架の苦しみで罰して、代価を支払った出来事の故に義と認められるのです。それで初めて公正さを失わないままで赦しと義と認められることが可能になりました。父なる神様はイエス様が人間の罪を犯したかのように見られて、実際に罰せられました。又イエス様の完全な生き方、義の生涯を人間が生きていたかのように見られて、実際の天国の喜びで報いられます。イエス様の完全な正しい生涯が信じる人のものとして認められて、罪人の墮落した生涯がイエス様のものにされて、そしてその通りに実際に扱われます。

生まれ変わり

生まれ変わり、新生とも言われますが、義と認められると全く同じ瞬間に起こります。ですから、救い、クリスチャンになる事は、義と認められる事と生まれ変わる事の組み合わせのようなものです。義と認められることは天国の法廷での無罪判決なら、生まれ変わりは聖霊様を通してイエス様が人の心の中に入る事です。主イエス・キリスト様の命がクリスチャンの霊的な命になります。義と認められる事が養子にする法的な手段だとすると、生まれ変わりは実際に出産によって子供になる事です。義と認められる事も、生まれ変わりも両方とも100%神様のみ業で、人間の努力で得られるものではありません。

生まれ変わりは聖霊によって主イエス様の命に与かる事だから、その特徴はイエス様との人格的な交わりです。人間には罪のために全く無かった命が与えられる事ですが、その命はイエス様との関係の中にしかありえません。一旦その命を得て、イエス様から独立して生きる事は不可能です。ですから、霊的な新しい命は私たちの命よりもキリストの命が私たちを通して現れて、私たちを活かして下さいます。ですからその命の結果として現れる変化はその本質ではなく、その命の実です。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ 2:20)

生まれ変わりも義と認められると同様に出産に似て一回切りの出来事ですが、そこから始まる新しい命はずっと続きますし、それを支えるために霊的な食べ物の聖書のみ言葉が必要です。

新しく生まれた事の第一の変化は罪赦された新しいクリスチャンの罪に対する態度が変わることです。救われる前は罪のいやな結果が嫌いであっても、罪そのものを愛していましたが、罪が赦されて、救いに与った新しい自分が罪そのものを憎むようになります。なぜなら、罪の反対は神様への愛です。主の愛を味わった以上罪がいやになります。たとえ罪をその後犯しても、主の十字架の愛を味わった人は繰り返して悔い改めて、主の恵みの下に戻ります。

証しの続き

先にかなり詳しく主イエス・キリスト様に出会った個人的な証をさせて頂きました。それはどうしようもない罪の奴隷で、罪責感で悩んでいた私の所にイエス様ご自身が訪れて下さって、その聖霊様を与えて下さって、私の心に罪の赦しの平安と喜びとを注いで下さいました。思いがけない恵みによって、私の為に十字架の上でその尊い血潮を流して下さいましたイエス様に出会いました。しかし、その後はどうだったでしょうか。

明確に救われたと分って、喜びに満ちた一日の後で、罪を犯してしまって、折角の平安と喜びは宙に浮いた年金と同様に一瞬の内に消えてしまいました。大変がっかりしました。又必死に祈って、イエス様に赦しを願って、やっとの事で平安が戻りましたが、以前のような大きな喜びはもうありませんでした。自分自身の中に依然として罪深い性質がある事に気がつきました。しかし、イエス様がきよいお方で、罪を憎んでおられると分ったから、私は罪との戦いに本腰で挑戦しました。

しかし、その戦い方は基本的に間違っていました。救いはイエス様の一方的な恵みであることがよく分りましたが、救われた者として、自分で正しい生き方をしなければならぬと誤解しました。ですから、私のところまで来られて、いつも共におられるキリスト様から目を離して、自分の努力や自分の状態に目を向けました。しかし、それは電源から離れた電気機関車を自分の体力で動かそうとするのとよく似た大変な事でした。

自分の力で神様の律法を守ろうとする努力は本質的に救われる前と救われる後は同じような無理な頑張りには過ぎませんでした。いつも罪の誘惑に負けて、頑張っても、頑張っても、自分の罪と罪深い欲望や習慣的な罪から自由になりませんでした。

しかし、イエス様に会った覚えがあって、繰り返して、イエス様の元に罪の赦しを求めに戻りました。又繰り返してイエス様も赦しの平安を与えて下さいました。しかし、このような律法で頑張るとすごく疲れる場合があります。また、少しずつ、平安に戻る時間的な距離が長くなりました。そこに悪魔は隙間を見て、すごい攻撃に出ました。それは、救いの確信についての戦いでした。「こんなに同じ罪を繰り返すあなたは、もう何のクリスチャンでもなく、もう辞めて、信仰を捨てなさい」と強く迫ります。しかし、幸いにイエス様の聖霊様は私の心から離れていなかったから、聖書のみ言葉を頼りにして、いつも新しい悔い改めに私を導いて下さいました。明確な救いの体験の記憶も助けになりましたが、人にイエス様の証をしながらも、悪魔は「あなたは偽善者です。自分でもまともなクリスチャンでないのに、何で人に証をするのか」と迫りました。

このような中で、とにかく神様に愛されている証拠を求めるようになりました。よい家庭があって、よい友達も、好きなガールフレンドも、高校生活の成功も、教会の青年会の楽しい交わりも、私の一種の拠り所になってしまいました。しかし、このような戦いが4年間も続いたから、ひどく疲れしました。しかし、今から考えれば、神様がこのような戦いも許した理由がありました。それは、自分自身の罪深さがいかに深いか、又自分の力でどうしようもない現実である事を徹底的に教えて下さった事でした。

二十歳の頃、徴兵制の軍隊生活に入らなければなりません。そしてある日、家から500キロ離れた場所で、主は私の間違った安心感の頼りをいっぺんに取り除いて下さいました。それは、私が重い心臓病にかかって、死にそうになって、1年間の病院生活を過ごさなければならない事でした。成功も、友達も、家族の支えも、死の恐怖の前に何の役にも立ちませんでした。又自分の気持ちを高めようとする努力も病気の疲れの中に全く不可能になります。「神様、あなたの愛は何処に消えたでしょうか」と嘆きながら祈っていました。

そこにやっと答えが出てきました。「私ですよ。あなたの為に十字架の上に死んで、蘇っている私がずっとあなたと共に来たのですよ。今からあなたが死んでも、その時もあなたと共にいますし、その後も共にいますよ。」私の頑張りではなく、ただ主イエス・キリスト様だけが答えでした。十字架の愛が見えてきました。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます (現在形)。」(ローマ5:8)

そして、退院して車で家に向かっていたある時、ルターの事のある本で読んでいた際、一つの言葉が強い力で私の目に飛び込みました。それは、「イエス様の十字架の血潮は十分です。」私の救いの確信は私の何かに頼るのではなく、一方的な恵みに寄ります。はるかかなたに消えたような神様の大きな平安と喜びが戻ってきました。「私ではなく、あなたです！」

それからの罪との戦いの中に、目を主に向けて、たとい私が倒れても、主のみ手の内に倒れるから、もう一度立ち上がります。私の歩みは私次第ではなく、イエス様次第と分って、気持ちがすごく楽になりました。

主は私に二つの事を明確に示して下さいました。先ず第一に私の救いの確信はきよめの成功に少しもよらない事が分かりました。失敗を繰り返しても、十字架の贖いによって義と認められた事実は変わらなくて、それにだけ私の救いがかかっていると言う事でした。

第二に、新しく生まれることだけではなく、クリスチャンとして生き続けることも神様の聖霊の働きによってしか出来ない事でした。そして、主のみ言葉の勧めは決して律法ではなく、聖霊の力を伴う恵みだと言う事でした。主のみ言葉に従う事は自分の努力ではなく、聖霊の導きや力に任せると主ご自身がそれを可能にする恵みです。

聖化（きよめ）

かなり多くのクリスチャンは私と同様に聖めについて誤解を抱いているようです。救いは十字架の恵みによって与えられた自由なプレゼントですが、聖めは自分の頑張り次第で、言葉そのものも疲れを起こすぐらいです。救いは恵みですが、聖めは律法を必死に守る事です。頑張ることは非常に深く日本文化の中に入っていますから、聖めについての正しい教えを聞いても、受け止める方の心にそれは律法的な要求にしか聞こえない場合が多いかと思えます。

しかし、救いも、聖めも、両方とも神様の恵みのみ業です。又共通して、どちらも私たちの人格を無視して、自動的に、ロボット的に行われるものではありません。救いは十字架の下で罪深い人間が主イエス・キリスト様に出会う事です。その出会いの中に主の赦し、和解、交わりが成立して、神様の子供の特権が与えられます。しかし、その全ては主と共にいる時に、主ご自身を人格的な信頼と触れ合いの中においてのプロセスです。主と離れた所で、いくら正しい教えがあっても救いがありません。

それと全く同じように聖めは主との人格的な交わりの中にしかおこりません。救いを出産に比べると、お母さんがなかったら、出産は不可能ですが、赤ちゃんの成長もそれからお母さん（またはお母さん代わりのお方）がずっと一緒になければ不可能です。同様に聖霊によって新しく生まれた神様の子供の成長、聖めは、主イエス・キリスト様と共に歩む事によって初めて可能です。主の人格的なみ言葉の糧を頂きながら、成長と力が増えて行きます。主の言葉に信仰と従う事で答えるのは律法による業ではありません。主がそのみ言葉と共に力を与えてくださるからです。たとえば、お母さんがその子供に美味しい食事によって、又愛情によって肉体的力と精神的な力を注ぐと、子供がお母さんの頼みに心から応答することが出来ます。

同様に聖めに含まれる、聞き従うことは決して律法ではありません。主は先に十字架の血潮によって全ての罪と汚れをきよめて、そして、み言葉を通してご自分の心、考え、愛を示して、この世の人々に対する救いの思いなどを示して、そしてその愛の御心は私たちの目にも最高の事の様に分かってから、初めて「あなたはこの事をして下さい」と言われます。主の御心が私たちの心にもなっている中に私たちは従う事が出来て、又その結果として主のみ業を見ることが出来ます。

聖霊様による新しい命が人生に入ると、古い性質の罪深い肉が一変でなくなる訳ではありません。最終的に天国に着くと肉が完全になりますが、その時までには同じ人間の中に新しい性質と古い性質との戦いが行われます。イエス様の聖霊の新しい性質が支配を増やして行く過程は清めか聖化かキリスト者の成長などの名前で呼ばれます。しかし、罪がクリスチャンに残っても、彼は義と認められているから、その罪のために最早裁きがありません。

進めの言葉と聖め

聖書の中に沢山の勧めがあります。例えばパウロの手紙に初めに素晴らしい恵みのメッセージが一杯ありますが、後半に沢山の命令形を使う勧めが出ます。しかし、命令形だからと言って、それは私たちの頑張りにならなければならない律法ではありません。

イエス・キリスト様の所に4人の人が中風の人を運んで連れて来た話を皆様がよく覚えているでしょう。(マルコ2章) イエス・キリスト様がその方に一番最初に言われた言葉は「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪が赦された」でした。素晴らしい一方的な恵みの言葉でした。その瞬間にその方の心の中に大きな変化が起こりました。罪赦された喜びと平安、神様との交わりといのちが心を満たしたに違いありません。しかし、イエス・キリスト様のその中風の方に対する次の言葉は命令形に変わりました。「起きなさい、床を畳んで、家に帰りなさい」です。

もしこれは律法なら、歩けない人に全く無理な要求です。しかし、そのイエス・キリスト様の言葉に癒す力が含まれていました。その言葉に従った瞬間に奇跡が起こりました。立つ事が出来るようになりました。聖書の諸勧めは聖霊を頂いたクリスチャンにとって力のついている恵みの言葉です。しかし、私たちはその主のみ言葉に全人格で応答する必要があります。力はその時に初めて働きます。

しかし、主のみ言葉に従う事を妨げようとする力も私たちの罪深い性質に残っていますから、聖めに、聞き従う事には戦いも付き物です。ですから、私たちはよく失敗して、主のみ声より自分の肉に任せてしまいます。そして、言い訳として、「私は未だ未だ弱いものです。」しかし、この言い訳は全くポイントはずれです。確かに私たちは弱いものです。しかし聖めは私たちの力によりません。主が弱くはありません。ですから、毎回失敗すると私たちはもう一度主の十字架の下に悔い改めて戻って、主の愛の力を頂く必要があります。

イエス・キリスト様の言葉を思い起こしましょう。

「人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。…あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。(ヨハネ 15:5, 7-8)

クリスチャンたちが一番信じられないみ言葉の一つは「イエス様を離れては、私たちは何もすることが出来ない」と言う5節です。自分で少しは出来ると思って、せっかくの主の恵みと力を失ってしまいます。

聖めの目的

救われた瞬間に私たちは天国の世継です。そして十字架の恵みがずっと有効ですから、必ず天国に行けます。聖めは救いの結果であり、そのプロセスの過程で最終的に救われた人は復活したイエス・キリスト様と同じような姿に変えられます。体の復活も聖めの一部です。

しかし、聖めは救われるためではありません。聖めは私たちが多くの愛の実を結んで、神様に用いられて、多くの人に福音を伝えて、神様に栄光を与えるためです。十字架の救いは私たちのためですが、聖めは主ご自身の栄光のためです。聖めは主の祈りの答えです。私たちが「み名が崇められるように」と祈ると、聖霊様は私たちを聖めて下さって、主の栄光のために愛、喜び、平安、忍耐などの実を結ばせて下さいます。主に栄光あれ。

お祈り

主よ、十字架の恵みによって救いのプレゼントを与えて下さって心から感謝致します。あなたのみ名が崇められるように私たちを聖めて下さる事を感謝致します。主よ、もっとあなたに似たものとさせてください。救い主イエス・キリスト様のみ名によってお祈り致します。